

ヴァラッロのサクロ・モンテとその礼拝堂装飾（1）

The Sacro Monte of Varallo and the Decoration of its Chapels

関根 浩子

Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授

Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：ヴァラッロ、サクロ・モンテ、現在の状況、略史、礼拝堂装飾、芸術家

Keywords: Varallo, Sacro Monte, Current Situation, Brief History, Chapels Decoration, Artists

Summary

Today, the Sacro Monte di Varallo has 45 chapels, either alone or combined into several monumental buildings, one fountain and a magnificent cathedral. Inside these chapels, scenes of Christ's life and passion are represented by more than 800 painted wood carvings, colored terracotta, and other plastic statues and frescoes. Of the many Sacri Monti, this complex of Varallo is not only by far the oldest in terms of its founding year of 1491, but also the most important in terms of art, architectural and urban planning, and religious history.

About such a complex of Varallo, researches are also underway on the vast number artists and architects who have been involved in the work in the more than 500 years since construction began. However, for the early years and many minor artists and architects, there is no or very few documents. Therefore, although it is difficult to describe them in detail, this paper attempts to grasp as much as possible the artists involved in the decoration of the chapels of the Sacro Monte di Varallo as part of my overall understanding of the movement of artists between Sacri Monti and the realities of co-production. In doing so, the time of construction, the names of the artists, their birthplaces, artistic formations, and the time of their activities are incorporated into the table to make it easier to visually grasp the transition.

As for the development, Chapter 1 provides an overview of the complex's long history, including its construction, chapels decoration, and current management, preservation, and maintenance. Next, in Chapter 2, along the current pilgrimage route, the artists who were involved in the construction and decoration of each chapel are specified in chronological order, and transition tables are created with information. In Chapter 3, we will analyze the birthplaces and artistic formations of the artists based on the tables we have created, and conclude with a summary based on the analysis results.

Since the complex of Varallo has a huge number of chapels and the artists who worked there, for the sake of paper width, this article will be divided into several issues.

はじめに：現在のサクロ・モンテの外観的特徴

ヴァラッロのサクロ・モンテ（図1）は、ヴァルセージアの支流であるマスタッローネ急流がセージア川へ流れ込む付近のひとつの険しい岩床上に建設されている。第4紀の氷河やセージア川の流水によって刻まれた古い地層が見られるこの天然のテラスは、海拔600メートルの所に位置し、ヴァラッロの歴史的市街地（海拔450メートル）を見下ろしている（図2、3）。かつては菜園や果樹園、葡萄畑などの段々畑がゆったりと広がっていたが、それらは今では放棄され、ニセアカシアやハシバミといった落葉広葉樹の藪で覆われている。しかし、肥沃な土地では収穫できる栗が今も生育している。非常に痩せた岩がちな土地は、野生のナナカマドやエノキ、ギョリュウモドキを伴ったオークやコナラの雑木林となっており、当初からの構成林であるシナの木やトネリコ、山カエデ、白シデなどが様々な形で混在している。他方、サクロ・モンテの聖なる囲い地（図4）では自然にかなり手が加えられている。特に、行程がまるで壮大なヴィア・クルーチスのようにブナ林の中を曲がりくねって丘上へ至る森林的ゾーン（図5）と、2つの広場を備えた丘上の都市的ゾーン（図6、7）のうち、後者の整えられた人為的な自然の形態は、ルネサンス庭園を手本としたロマン主義期の遺産と言えるもので、原生ではないエキゾチックな観賞種も多数植栽されている⁽¹⁾。

以上のような環境を風景的背景として、

天然のテラス上の現在のサクロ・モンテでは、単独か、あるいはモニュメンタルな建造物中に複数の礼拝堂をまとめる形で45もの礼拝堂と1つの泉、壮麗な大聖堂が配されている。そしてそれらの礼拝堂内では、800体以上もの彩色木彫や彩色テラコッタなどの塑像と壁画によってキリストの生涯や受難の場面が表現されている。サクロ・モンテ群の中で、ヴァラッロのサクロ・モンテは、1491年という創設年の点で圧倒的に最古であるだけでなく、美術的、建築・都市計画的、宗教的な意味でももっとも重要な総体となっている。

このようなヴァラッロの総体については、すでにかんがりの研究が蓄積されている。その研究史については先行研究中⁽²⁾でも言及され、拙著⁽³⁾においてもその略史を紹介しており、改めて本稿で言及することはしないが、礼拝堂が優れた彫刻や壁画で装飾されているためか、とりわけ美術史や文化財保護、また建築・都市計画史的研究や案内書が多いと言える。従って、着工以来500年以上もの歴史の中で制作や建造、改修、修復などに携わった夥しい数の美術家や建築家たちについての研究も進み、20世紀後半以降になると、重要な芸術家についてはモノグラフが刊行され、展覧会も開催されるようになった。しかし、初期の不詳の美術家や多くのマイナーな美術家などについては、イタリア本国ですら殆ど紹介されておらず、資料も皆無か、あっても僅少である。従って、そうした芸術家たちについて詳述することは難しいものの、稿者が進めるサクロ・モンテ間における芸術家の移動や共同制作の実態などに

関する全体的把握の一環として、本稿ではヴァラッロのサクロ・モンテの礼拝堂の建造や装飾に携わった芸術家たちの把握を可能な限り試みる。また、その際、各礼拝堂の建造時期や関わった芸術家たちの名前、芸術的形成・修練地、活動時期を表に落とし込み、その変遷を視覚的に把握しやすいものにする。

展開としては、まず1章でヴァラッロのサクロ・モンテの礼拝堂の建造や装飾、現在の管理や保存・メンテナンスなどの長い歴史を概観する。次いで2章では、現在の巡礼の行程に沿いながら、各礼拝堂の建造とその装飾に従事した芸術家たちを可能な限り時系列で明示し、併せて情報を落とし込んだ変遷表（表1、表2、次号以降掲載）を作成していく。そして3章において、作成した表をもとに芸術家たちの出身地や芸術的形成地、活動時期などについて分析を行い、最後に分析結果に基づく総括を行う。適宜、平面図（図1）や表を参照されたい。

なお、ヴァラッロのサクロ・モンテは礼拝堂数も従事した芸術家の数も膨大であるため、紙幅の都合上、本稿は数号に分けて掲載していく。

1. ヴアラッロのサクロ・モンテの建造・装飾略史

まず、本章では、先行研究を参考にしながら、ヴァラッロのサクロ・モンテの建造と礼拝堂内の場面の設営、関わった主要な芸術家の歴史を簡略に概観していく。

1-1. 最初期（起源）

ヴァラッロのサクロ・モンテは、エルサレムの聖墳墓の管理者を務め（1478年）、その後も数年のうちに再び聖地に赴いたと考えられるフランシスコ会厳修派の傑出した宗教家ベルナルディーノ・カイーミ神父（15世紀前半-1499）（図8）が、危険を冒さずにもっと容易にパレスティナのキリストゆかりの聖蹟を訪問できるよう、ヴァラッロの険しい岩床上にそれらの聖蹟の再現、すなわち「代用エルサレム」の建設を意図したことに始まる。彼は政治家でもあり、ミラノ管区の管区長、ルドヴィコ・イル・モーロの親友、ルドヴィコの妻ベアトリーチェ・デステの聴罪司祭でもあった。また、かつてはスペイン宮廷への大使も務めたことがあるとされる⁽⁴⁾。

カイーミがヴァラッロの地でのキリストゆかりの聖蹟の再現を決定したことは、フランシスコ会厳修派が同地に定住を開始したと無関係ではない。ある意味で同教団の定住が建設の契機となったとも言える。厳修派は1480年以降、フランシスコ会本部のピエモンテのロンバルディア領への拡大政策を進めていた。そして1486年から1493年にかけて、後にサクロ・モンテと呼ばれることになる山の麓にサンタ・マリア・デッレ・グラーツィエ修道院を建設した。フランシスコ会では、主要な任務である説教の実践の中で、キリストの受難の出来事に関する知識を民衆に広めて彼らの信仰を培うことが、まさに重要な課題のひとつになっていたが、同修道院の附属聖堂の大きな内陣と後陣を仕切る壁体（トラメツォ）に、後述するガウデンツィオ・

フェッラーリ（1475/80-1546）がキリストの生涯と受難の諸場面を壁画で描いたことは、彼らのそうした任務と密接な関わりを持っていた。

カイーミは、1481年に初めてヴァラッコを訪れたと思われ⁽⁵⁾、それ以降住人たちとの接触が始まっていたと考えられるが⁽⁶⁾、修道院建設の最中、フランシスコ会の目的自体に突き動かされ、パレスティナでの経験にもとづいて、当時のロンバルディア領の境界に当たる山の頂にパレスティナを再現しようと考えた。そしてヴァラッコの住人たちの援助や支持も得て、1486年以降のいずれかの時期にその実現に着手する。そしてフランシスコ会士やヴァラッコの権威者、有力な一族の署名のある1493年4月14日付の公文書によって、サンタ・マリア・デッレ・グラーツィエ修道院全体と山上に既に建設されたもの、並びに今後建設されるべきものの厳修派への信託を合法的に認められている。しかし、初期に建設された礼拝堂のひとつである「キリストの墓」（現在の第43堂）の入口上方の石板（図9）に、1491年の年記と、礼拝堂建設に当たって経済的にもカイーミを援助したヴァラッコ出身の貴族ミラノ・スカロニーニの名前、並びにカイーミがキリストゆかりの聖蹟を再現しようとした理由が明示されていることから、山上の建設は1491年より前にすでに開始されていたことは疑いない。以後、代用聖地はカイーミの指揮下で、さらにカイーミ没後は聖地を熟知した2人のフランシスコ会神父、カンディド・ランツォ神父（1509年まで）と木材の専門家でもあるフランチェ

スコ・ダ・マリニャーノ神父（1517年まで）の監督下で発展を遂げ、1514年には、絵画や彫刻による設営がなされた礼拝堂は20堂⁽⁷⁾を超えていた。1517年以降は、有力な後援者のエミリアーノ・スカロニーニが没し、院長フランチェスコが同地を後にしたものの、教会財産管理委員としてピエトロ・ラヴェッリとベルナルディーノ・バルデイが選出され、事業は最終的な拡大をみた。そして「磔刑」の礼拝堂（現在の第38堂）や、フランシスコ会修道院の建設、並びにカイーミの時代にアプシスの部分だけがすでに建てられていた旧聖堂（キエーザ・ヴェッキア）が完成に至る。

しかし、カイーミの構想を反映した最初期の山上の様子⁽⁸⁾がどのようなものであったかは、1514年の最古の案内書⁽⁹⁾から窺われるだけで、トレント公会議以降のカトリック改革期における再整備のために、当初の面影はわずかな礼拝堂に留められているにすぎない。古い礼拝堂群のうち現在まで残ったのは、「地獄の谷」に配され、山岳地域の小聖堂的外観を呈している「ナザレ」（第2、3堂）（図10）と「ベツレヘム」（第5、6、7、8堂）の総体（図11）、「最後の晩餐」（第20堂）、「磔刑」（第38堂）、「キリストの墓」（第43堂）、「聖母の墓」（第46堂）、神殿の広場の「復活のキリストの泉」（図1では45番）で、他の礼拝堂はすべて後代に破壊されるか改造されてしまった。現存する初期の建造物から判断する限り、古い礼拝堂群は、建造の手本や使用する建材をヴァルセージア、すなわちヴァラッコが属する地域の建築文化に求めたもので、まるで自然

のグロッタや、田園ないしは郊外の建物であるかのように質素であった。

初期の20堂の礼拝堂は、対応するパレスティナのキリストゆかりの聖蹟で起こった出来事を絵画と彫刻によって表現した、それぞれひとつないしは複数の「ミステリ」を堂内に受け入れていた。礼拝堂内の彫刻や絵画によるイメージ群の存在は、このプロジェクトがフランシスコ会の説教術と強く結びついていることを示している。15世紀の黙想書群はしばしば、聖書が語る諸場面を意識的に想像し、それらの場面に現実世界の人々を住まわせ、できる限り祈祷を容易にするよう勧めていたし、フランシスコ会士は説教の中で、聖書が語る出来事やそれらが起きた場所の細部に注意を向けたり、物語を強い感情的関与によって豊かにしたりしながら、イエスの生涯や受難について語っていたからである。カイーミ神父自身、聖週間におけるキリストの受難の諸段階を説教時に詳述した際、主の受難の苦しみを自身のものとして共に苦しんでいたとされる⁽¹⁰⁾。また、語られた場面を信徒が視覚化しやすいように絵解きも利用されていた。15世紀末のロンバルディア領のフランシスコ会厳修派の聖堂で、キリストの生涯の諸場面を描いたトラメツォが身廊と内陣との間に設置され、説教者の語りを助けていたのはその例である。中でも、上掲のガウデンツィオがトラメツォに1513年に描いた壁画（図12）は、その代表的作例と言える。カイーミにとって、こうしたトラメツォと同じような機能をもっていたに違いないのが、「サクロ・モンテ」の前身に当たるヴァラッロ山

上の「代用エルサレム」期の総体だったのである。それは、敬虔な巡礼者がパレスティナのキリストゆかりの聖蹟に身体的に入り込み、礼拝堂内に設置されたイメージ群が物語るキリストの生涯の諸段階をキリストとともに追体験することで、聖地への旅という霊的経験の達成を可能とさせる並外れた道具であった。

この時期の礼拝堂の装飾について言えば、ヴォールトは堂内も堂外もフレスコで描かれていた。そして堂内の壁画は、当月上演された聖劇の場面か、主役の彫刻群が演じている場面の直前か直後の瞬間を表現していた⁽¹¹⁾。また、彫刻像は、少なくとも1514年までは木彫であった。具体的には、最初期の木彫像は、身体部が背側から削り抜かれ、髭と頭髪を含め全体が一本の木材から彫り出されていた。《復活のキリスト像》や《塗油石》の群像（図13、13-1、現在ヴァラッロ絵画館蔵）はそうした丸彫の例で、特に後者は15世紀の最後の10年間に遡るものである。その後、露出する顔や手足部分だけを仕上げ、石膏に浸した布を纏わせて彩色し、本物に似た長い頭髪と髭を付けて完成させる略式のマネキン像になっていく。「受胎告知」（第2堂）や「最後の晩餐」（第20堂）（図14）の木彫群や、「キリストの墓」の前室の《マダラのマリア》像はそれらの例である。これらの木彫像は、中世的な名残を多分に留めたプリミティブないしは表現主義的な作品ではあるが、形体がシンプルな上、素材として慎ましい木が使用されているため、当時は、この山の初期に浸透していたフランシスコ会的黙想と祈祷の雰囲気、つまり

キリストゆかりの聖蹟の記憶という雰囲気によく合致していたに違いない。

初期に、この「代用エルサレム」で制作した美術家については依然として明らかにされてはいない。とはいえ、彫刻家としては《塗油石》がデ・ドナーティ兄弟（ジョヴァンニ・ピエトロ・デ・ドナーティ 1470年7月26日より前-1531年1月27日より前；ジョヴァンニ・アンブロジーオ・デ・ドナーティ 1480年3月21日より前-1516年4月8日より前）⁽¹²⁾ないしはその工房に同定され、《復活のキリスト》像もマドンナ・ディ・イントラのマエストロである可能性が指摘⁽¹³⁾され始めている。しかし、諸文献が指摘しているサンタ・マリア・デッレ・グラーツィエ修道院の修道士が営んでいた木彫の工房については、依然解明されてはいない。また、絵画については近年、「聖母の墓」の壁画の作者が、ステーファノ・スコッティ（1485年10月3日より前-1524）と不詳の助手、そしてごく若い頃のガウデンツィオに帰された⁽¹⁴⁾。

1-2. 16世紀初め：ガウデンツィオ・フェッラーリの活躍

魅力的で理解しやすい場面を備えた黙想と祈祷の助けとなる聖地の再現というフランシスコ会士たちの希望や要求は、続いて16世紀初頭以降1528年まで、この山上で主役として活動した画家にして彫刻家、建築家でもあったヴァルセージアのヴァルドウヅジャ出身のガウデンツィオ・フェッラーリの並外れたナレーション力と造形力によって実現されていく。その質の高い壁画や彫刻については、早くも1566年にフ

ランチェスコ・セサッリがそれをガウデンツィオに帰し⁽¹⁵⁾、その後の批評によっても追認されてきた。彼は、ロンバルディア的環境（ヴァラッロは当時政治的・文化的にミラノ公国に従属）のなかで修練を積むとともに、レオナルド・ダ・ヴィンチからブラマンテやブラマンティーノに至るミラノの最新の芸術的創意を取り入れた芸術家であった。さらに中央イタリアへの旅行によって、ペルジーノやピントリッキオ、シニョレツィといった初期ルネサンスの重要な芸術家たちの作品に触れて、その芸術性を高めもした。

礼拝堂内の聖なる場面とそのナレーションにおいて、等身大の彫刻群に主要なテーマを語らせ、壁画の登場人物たちに物語を補完させるような役割を与えて系統立てたのは、まさにこのガウデンツィオであった。彼は絵画と彫刻の古い関係を変革し、主役の彫刻像が演じる劇を補助するために、壁画を四面から群衆が殺到する形に変えたのである。彼が手掛けた礼拝堂群では、例えば第38堂《磔刑》（図15）のように、彫刻による群像と絵画による群像表現とが緊密な調和を見せている。実際には複雑な芸術的、文化的融合の所産でありながら、表面的にはごく自然で誰にでも容易に理解できる様式によって、ガウデンツィオは諸場面に日々の生活から採用したあらゆる世代、あらゆる社会的階層の登場人物を住まわせて一体化を図るとともに、ナレーションを豊かにした。ガウデンツィオと彼の工房が手掛けたと考えられる礼拝堂の場面は、「受胎告知」（第2堂）や「マギの到着」（第5堂）、「キリストの降誕」（第6

堂)、「羊飼いの礼拝」(第7堂)、「神殿への奉獻」(第8堂)、「聖ヨセフの2度目の夢」(第9堂)、「法廷に上るキリスト」(第32堂)、「磔刑」(第38堂)、「ピエタ」(第40堂)、そして大聖堂のスクローロの《永眠の聖母》である。これらのうち「受胎告知」とスクローロの《永眠の聖母》はマネキン式の木彫像であり、彼の最初期の作品とみなされるが、その後は木材の使用をやめ、塑像(テラコッタ)を用いるようになり、サクロ・モンテの窯と採掘場を活性化した⁽¹⁶⁾。

この頃、ガウデンツィオとともに制作した助手や弟子としては、息子のジェローラモや画家兼彫刻家でカラヴァッジョ出身のフェルモ・ステッラ(c.1490-1562)、そしておそらくヴェルチェッリの有名な画家一家に生まれたジュゼッペ・ジョヴェノーネ(1485/90-1583)が挙げられる⁽¹⁷⁾。ジョヴェノーネは父アメデオによって1521年にガウデンツィオの工房に入れられ、1524年にはまだガウデンツィオの下にいた。

1528年にガウデンツィオはこの山を去るが、この総体の建造現場は、名声や肩書のあるその他の芸術家の関与や時宜に適った刷新がなされないまま、その後も16世紀後半の初め頃まで数十年間彼の手本を模倣していく。

この初期の代用エルサレムの総体の名声は高く、ヴァラッロを目指して巡礼が絶えず訪れており、1507年には、ノヴァーラ大司教で枢機卿でもあったフェデリーコ・ディ・サンセヴェリーノによって、同所の礼拝堂の訪問に対し免償が認められている⁽¹⁸⁾。

1-3. 1560年代：建築家ガレアツォ・アレッシの再整備プロジェクト

ガウデンツィオが山を去り、ジョヴァンニ・アンジェロ・ドロゲッティとミラノ・スカロニーニの曾孫ジョヴァンニ・アントニオ・スカロニーニが1530年に教会財産管理委員に選出されると、旧聖堂の内装に配慮がなされ、1544年には「ナザレ」の総体内に新しい礼拝堂が建設された。さらに聖なる囲い地への当初の小さな出入口近くにかつてのピラトの邸館が建てられた他、「キリストの昇天」や「聖霊降臨」の礼拝堂の建設も開始された。しかし、初期のサクロ・モンテの主要な組織者たちが姿を消すと、聖なる場面に時間的連続性を付与するという目的で、多岐に亘る全面的な配列替えが行われ始めた。その結果、かなりの数の礼拝堂を擁していた16世紀半ばのこの山上では、もはやキリストゆかりの聖蹟に基づく初期の秩序も、時系列による新たな連続性ももはや識別できない状態⁽¹⁹⁾になっており、再整備の必要性が生じ始めていた。

このような状況下、カイーミの建設を当初から資金面で支援していたヴァラッロの富裕な貴族の末裔であったフランチェスカ・スカロニーニと婚姻関係を結んでいたミラノの貴族ジャコモ・ダッダが1560年にサクロ・モンテの教会財産管理委員に選出され、この巡礼地のためにガレアツォ・アレッシ(1512-1572)へ関与を要請し、再整備計画に出資することになる。ダッダ家の当主たちは、1500年当時のミラノで、ボッロメーオ家やピアンタニダ家などとともに、商人や銀行家、不動産所有

者からなる支配階級に属していた。また、アレッシはペルーシア出身の建築家で都市計画家でもあり、すでにジェノヴァで愛好家や商人階級のための別荘や宮殿の設計者として活動しており、その後はミラノでも聖俗両方の大規模な現場で多くの仕事を手掛けていた。再整備の必要性は彼が参加したことで決定的となった。

ジャコモ・ダッダから新たにひとつの聖都全体を構想する任務を帯びたアレッシは、1565年から1569年頃にかけて起草した大きな手稿本の『ミステリーの書』(*I misteri della vita, passione, morte di Cristo*)

(ファリノーネ・チェンタ市立図書館蔵)⁽²⁰⁾において、ルネサンス後期の理想都市的な新しいエルサレムを計画した。同手稿本からは、アレッシが、総体の宗教的内容は保持しつつも、カイーミの「代用エルサレム」を、同時代の世俗の装飾的邸館と噴水や生垣なども備えたイタリア風庭園とによる、3つの異なったゾーンから成る驚異と技巧の場所に変えようとしていたことが分かる(図16)。具体的には、現在の出入口に当たるモニュメンタルな門や第1堂の「アダムとエヴァ」の礼拝堂から始まる高低のある最初の方のゾーン(地獄の峡谷)では、豊かな樹木や植物を背景に、噴水や水遊びの場所を設けながら、受胎告知からエルサレムの入口に至るまでの物語に向けられた礼拝堂を受け入れる予定であった。それに対し、2番目の山頂の平らなゾーンでは、前廊の付いた八角形広場の周囲にキリストの受難物語の劇場に当たる洗練された都市的邸館を配して、城壁に囲まれた都市的環境、つまりエルサレムを再現

することが予定されていた。そして3番目のゾーンには、荒れ果てて森のように見える殆ど手つかずの自然のなかに、リンボや煉獄、地獄の礼拝堂を受け入れることが想定されていた。

アレッシの新計画は、実現されていれば、芸術のスペクタクルによるだけでなく、自然のスペクタクルによっても巡礼者を魅了したに違いないが、『ミステリーの書』で実現されたのは出入口のモニュメンタルな門(図17)と「アダムとエヴァ」(第1堂)のみであった。とはいえ、アレッシが残した建築や広場の図面、並びに堂内の聖なる場面のイメージ図、配列は、後世の芸術家や職人たちにとって手本や見本であり続け、現在のサクロ・モンテの時系列的配列の基礎にもなっている。

1-4. 1570、80年代における聖カルロによるアレッシの新構想の修正

ところで、16世紀後半は修道士と世俗の教会財産管理委員会との間に激しい対立が生じた時期に当たる。この争いを主に仲裁したのは、1568年から1584年までの間に少なくとも4回⁽²¹⁾ヴァラッロを訪れたミラノ大司教聖カルロ・ボッロメーオ(1538-1584)(図18)であった。彼は、争いを仲裁し、選り抜いたこの巡礼地で体力を消耗する祈祷と悔悛を行っただけでなく、山上の整備に関する改革的な仕事も行った。1584年の最後の訪問時には、巡礼の行程を整理して宗教的内容をより明確にするために、神学と建築の専門家を数名同伴してもいる。

ボッロメーオは、アレッシによる新プロ

ジェクトを退けて礼拝堂をごく簡素にするよう求めた。また、宗教改革によって動揺していたカトリックの有効なプロパガンダの道具となるよう聖なる内容の表現を最も重視した。これによってこの山は、稿者によれば、「代用エルサレム」から対抗宗教改革的「サクロ・モンテ」へと変貌が始まることになる。16世紀後半の礼拝堂群では、初期の古い礼拝堂群においてかつてそうであったように聖なる場面が空間全体を占有しているが、この時期に木や鉄の格子が設置されたため、古い礼拝堂群とは異なり、巡礼者は格子やガラスに隔てられて場面から排除され、外部から場面に立ち会うようになる。聖なるミステリー群に充てられた空間と俗なる信者用の空間のこうした分断は、カトリック改革が提示した教会における空間の分断の概念を反映したものであった。

この時期にはテラコッタの使用が放棄され、塑像は髭や毛髪を含む粘土や大理石粉を捏ねて成形され、焼成はなされなかった⁽²²⁾。唯一、この巡礼地を2度訪れていたサヴォイア公カルロ・エマヌエーレ1世の好意により1586年から1595年にかけて建造、設営された「嬰兒虐殺」の劇的な礼拝堂（第11堂）だけがテラコッタを再使用し、ガウデンツィオが創始した劇的演劇性に回帰しているにすぎない。アレッシが去った1569年以降、1593年までの間には、下方の森林のゾーンの殆どすべての礼拝堂に当たる「聖ヨセフの2度目の夢」（第9堂）から「エルサレム入城」（第19堂）までが建設され、絵画と彫塑像による堂内の設営も大方完了された。古い「ナザ

レ」と「ベツレヘム」の総体は、新しい配列においても維持され、拡張された。また、「エルサレム入城」（第19堂）までの庭園の整備や巡礼路はアレッシの案に従って具現された。

この時代に礼拝堂群で仕事をしてきた美術家には、無名の美術家の他、オラツィオ・ガッリノーネ・ダ・トレヴィリオ（1584年に記録）やヴァラッロ出身のジャン・ジャコモ・テスト（1582年に記録）、フランドル出身で主にミラノで成育、活躍したフィアミンギーニと通称されたデッラ・ローヴェレ兄弟（兄：ジョヴァンニ・バッティスタ 1560/61-1627、弟：ジョヴァンニ・マウロ 1575-1640）⁽²³⁾といった洗練された画家や、ヴァルソルド出身のジャコモ・パッラッカ（通称イル・ヴァルソルド）（1546-1597）、ルガーノ出身のミケーレ・プレステイナーリ（1595年に記録）、カンペルトーニョ出身のバルトロメオオ・バダレッロ（1580-83、1587-89に記録）のような彫刻家がいた。また、ブルターニュ地方の都市ディナンの彫刻家一家の出で主にピエモンテで活躍したジャン・ドゥ・ウェスパン（通称ジョヴァンニ・タバケッティ）（c. 1567-c. 1615）やヴァルセージアのアラーニャ出身のジョヴァンニ・デンリーコ（1559-1644）⁽²⁴⁾のような偉大な塑像家も制作を開始していた。16世紀の最後の10年間を迎える頃には、サクロ・モンテは、下方のゾーンについてはほぼ完成されていた。

1-5. 17世紀

聖カルロの没後は、ミラノにおける彼の

カトリック改革の協力者であり忠実な注釈者でもあったノヴァーラ司教カルロ・バスカペ（1550-1615）によって、1593年以降、山頂の都市的ゾーンの整備が再開される。ヴァラッロのサクロ・モンテは、1587年以降、ノヴァーラ司教の監督下に入るが、歴代司教のうち最も積極的にサクロ・モンテの造営に関わったのは、このバスカペであった⁽²⁵⁾。彼は、建設や聖なるものの表現すべてについて決定権を要求し、1602年まではペルーシア出身の画家兼建築家ドメニコ・アルファーニ（c. 1480-c. 1553）、次いで彫刻家であり建築家でもあった上述のジョヴァンニ・デンリーコ（図19）⁽²⁶⁾とヴァラッロの彫刻家、建築家であり、指物師でもあったバルトロメオ・ラヴェッリ（1589-1645/46）⁽²⁷⁾の2人の協力を得て、都市的ゾーンの決定的な整備に取りかかり、ほぼ現在の形態を完成させた。

トレント公会議では聖なるイメージの役割、つまり聖史を彫刻や絵画で図解、図示するためにイメージを利用することの是非が問題とされた。そして最終的にイメージの役割は肯定的に捉えられて公会議は閉幕した。この時イメージについては、大部分文盲の信徒を真の信仰に向けて教育したり、聖典（教区の司教によって内容が規制、検証されているもの）の正しい理解へと導いたりするための重要な役割が再認識された。そしてカトリック教会は、巡礼者や信徒の誘導や参加、宗教的カタルシスを備えた作品に適った悲劇性のこれ以上ない明瞭さを求めた。

バスカペは教会の要求に応じるべく、

ヴァラッロでは、聖カルロと同様に、サクロ・モンテに新しい秩序を与えることに留意し、山全体を再編の対象として礼拝堂内に表現すべきことを命じ、幾つかの礼拝堂では先行の場面も変更した。例えばこの時、「最後の晩餐」の場面は物語の順序に対して一貫性を欠く場所にあったため、現在の第20堂の位置に移された。聖なる場面の表現の役割はキリストの生涯の教示にあったから、物語の内容は十分に読み取れるものでなければならなかったし、異なる多様な芸術家が制作するにしても、登場人物は信徒たちからすぐにそれと識別されるものでなければならなかった。それゆえにバスカペは、複数の礼拝堂に姿を見せる同じ登場人物（例えばキリスト自身や死刑執行者たち）に同じ容貌をもたせるよう明確な指示を出すこともあった。さらに彼は、美術家や教会財産管理委員と話し合い、先頭に立って個々の礼拝堂に設置すべきエピソードのプロットを決めた。そして「能力の高い」芸術家たちを招集して制作に当たらせるよう求めるとともに、物語が誰にとっても明瞭で理解可能なものであるよう、制作中であっても芸術家たちに修正を課した。このようにしてバスカペは、この山を聖典の真実を信徒に教えるための道具「サクロ・モンテ」にしていった。

1500年代の最後の10年代から1640年頃までの間には、以下の礼拝堂が具現され、一部は内部の設営もなされた。「カルヴァリオへ上るキリスト」（第36堂）や、ピラトとキリストに関係する全場面を含むモニュメンタルなピラトの邸館、法廷の広場、「カイアファの法廷でのキリスト」（第

25 堂)、「ヘロデの法廷でのキリスト」(第 28 堂)、さらに神殿の広場では「十字架に釘で打ち付けられるキリスト」(第 37 堂)と「十字架降下」(第 39 堂)の礼拝堂である。後 2 堂は「磔刑」(第 38 堂)の礼拝堂に隣接している。1614 年には、この巡礼地の名声に比して旧聖堂があまりにささやかであったため、新しい壮麗な大聖堂の建設が開始され、1649 年には内陣が完成している。さらに幾つかの「ミステリー」の場面が移動され、刷新もされた。

この時期に活動した芸術家は多様で出身地も異なっていた。主要な芸術家を挙げれば、まず画家としては、既掲のデッラ・ローヴェレ兄弟が挙げられる。彼らは快活かつ優雅な語り手であり、「嬰兒虐殺」(第 11 堂)を完成させている。彼らに対し、ヴァレーゼ近くのモラッツォーネで生まれ、ローマを経て主にミラノで活躍したピエルフランチェスコ・マツケッリ(通称イル・モラッツォーネ)(1573-1625/26)⁽²⁷⁾は、ロンバルディアの後期マニエリスム最大の主役のひとりであった。彼は、ヴァラッロでは、「カルヴァリオへ上るキリスト」(第 36 堂)や「エッケ・ホモ」(第 33 堂)、「死刑の宣告を受けるキリスト」(第 35 堂)の礼拝堂の壁画を手掛けた。次いでテラコッタ群の制作に従事した主要な彫刻家には、上掲のタバケッティとデンリーコがいた。いずれも感動的なリアリズム的作風が特徴の塑像家であった。

バスカベの方針はその後も数十年生き続け、多様な出身地の芸術家たちがサクロ・モンテで制作に従事する。例えば絵画では、ジョヴァンニ・デンリーコの弟で、出

身はヴァルセージアであるものの、中央イタリアへの修業の旅でカラヴァッジョの作品から多大な影響を受けた画家アントニオ・デンリーコ(通称タンツィオ・ダ・ヴァラッロ)(c. 1575/82-1633/35)⁽²⁸⁾は、「ピラトの官邸でのキリスト」(第 27 堂)や「手を洗うピラト」(第 34 堂)、「ヘロデの法廷でのキリスト」(第 28 堂)の礼拝堂群の壁画を手掛けた。タンツィオの後には、画家クリストフォロ・マルティノーリオ(通称イル・ロッカ)(c. 1559-1662 以前)⁽²⁹⁾や彫刻家、版画家ガウデンツィオ・シェーティ(?-1698)⁽³⁰⁾といった地元の芸術家や、メルキオーレ・ゲラルディーニ(通称イル・チェラニーノ)(1607-1668)⁽³¹⁾のようなロンバルディアの首都ミラノで頭角を現した芸術家たちが、17 世紀の最初の数十年の伝統を守りながら、「笞刑」(第 30 堂)や「カイアファの法廷でのキリスト」(第 25 堂)、「中風者の治癒」(第 15 堂)の壁画や、取り壊された 2 つの礼拝堂の塑像群、さらに「十字架に釘で打ち付けられるキリスト」(第 37 堂)や「十字架降下」(第 39 堂)の壁画を制作した。さらにヴァルセージア出身で、タンツィオ・ダ・ヴァラッロに魅せられたものの、同時代のアンドレア・サッキやおそらくはマラッタを含めたローマ・バロック的古典主義にも通じた画家ピエルフランチェスコ・ジャノーリ(1624-1692)⁽³²⁾は、「法廷に上るキリスト」(第 32 堂)や「ピラトの官邸に戻るキリスト」(第 29 堂)の礼拝堂の壁画装飾を手掛けている。

しかし、順調に進んでいた建造や礼拝堂装飾は、17 世紀後半には大幅な遅延を被

る。それは、「タボル山上でのキリストの変容」(現在の第17堂)の礼拝堂と、とりわけ1660年代から80年代初めまでディオニジ・ブッソラの塑像家集団を受け入れることになった新聖堂に莫大な費用を投じなければならなかったためである。ディオニジ・ブッソラ(1615-1687)⁽³³⁾はミラノ大聖堂で活動したロンバルディア(出身都市不詳)の彫刻家で、17世紀中頃に行ったローマ滞在で彫刻家ベルニーニや画家ピエトロ・ダ・コルトーナによるローマ・バロックの作品の清新さに触れ、それをヴァラッロや他のサクロ・モンテにも齎した。このことは、ヴァラッロのサクロ・モンテの宗教的行程の終点に当たる大聖堂の140体以上のテラコッタ像で構成された「栄光の聖母被昇天」を伴う輝くクーポラに見て取れる(図20)。このクーポラはヴァルセージアの上級評議会から依頼されたもので、多大な費用が投じられただけに、イリュージョニズムの極致とも言える見事な仕上がりを見せている。

1-6. 18・19世紀：隣接するその他の建物の建造

1707年にはヴァルセージアはサヴォイア公国領となり、1713年に新聖堂のファサード上に同家の紋章が描かれて、それが速やかに確定される。1700年代半ば頃から、貴族や富裕な市民が一定の季節に住む地域をサクロ・モンテとしたことに関連して、この時期には都市計画的、都市建築的水準の世俗建築が建てられるようになることも特徴である。

まず、1740年頃には、大聖堂の大祭壇

と聖母マリアのスクローロのプロジェクト、並びに最後の礼拝堂である「アンナスの法廷でのキリスト」(第24堂)の建設と堂内設営のために、ローマ出身でサルデーニャ王付きの第一建築家ベネデット・アルフィエーリ(1699-1767)⁽³⁴⁾との契約が記録される。第24堂は、トリノ在住のヴェルセージア出身者のコミュニティーの出資で、18世紀一杯かけて建造されたもので、後にイントロビオ出身の彫刻家アントニオ・タンダルディーニ・ヴァルサッシーナ(1677-1748)⁽³⁵⁾とその工房の塑像と、カヴァッレルレオーネ出身のサヴォイアの宮廷彫刻家ジョヴァンニ・バッティスタ・ベルネーロ(1736-1796)⁽³⁶⁾の手になる最後の神官アンナス像が加えられることになる。次いで、1770年から1773年までの間には初期の総体のシンボルのひとつであった旧聖堂が取り壊され(《聖霊降臨》のみ救われ、ヴァラッロ絵画館が収蔵)、その場所に霊的实践のためのオスピツィオ(現在のカーザ・デル・ペッレグリーニ)が建築家マッテオ・マッソーニ(生没年不詳)の設計で建設された。1776年には、金門(ポルタ・アウレア)の所にあった旧アーケードの取り壊しと、タボル山の上の斜面上にあった「園での祈り」の旧礼拝堂の取り壊しが決定された。次いで1778年には、大聖堂広場の聖堂に向かって左側を区切るアーケードが実現され、その下に「最後の晩餐」(第20堂)と「園でのキリストの祈り」(第21堂)の礼拝堂が一直線に配された。

19世紀に入り、1816年には、第20、21堂が配されている上掲のアーケードの上

に、女公爵セヴェリーノ・サンマルティーノ・パレッラが自費で住居（カーザ・パレッラ）（図 21）を建て、自身の夏の滞在場所とした。さらに 1863 年にはアーケードが延長され、「園でのキリストの祈り」（第 21 堂）と「使徒を目覚めさせるキリスト」（第 22 堂）がその下に配された。同じ 1863 年には、この山の初期の拠点で、1493 年にはすでに存在していた質素な地方的建造物であったフランシスコ会士の旧隠棲所が取り壊され、「キリストの墓」（第 43 堂）の上方にもうひとつの世俗建築である住居（図 22）が建設され、貴族たちの避暑用に使用された。これらは宗教的総体内に実現された初の世俗的建造物であった。1896 年には、数多くのプロジェクトがあったにも拘らず約 2 世紀間決して実現されることがなかった大聖堂のファサードが、ヴァルドウッジャ出身の建築家ジョヴァンニ・チェルーティ（1842-1907）⁽³⁷⁾ の設計に基づいて付けられ、完成に至る。

19 世紀には、時の経過とともに保存に対する意識も芽生え始め、現存する建物の修復と改善を目的とした幾つかの重要な関与、並びに「マギの到着」（第 5 堂）の前方にある柱廊と「磔刑」の礼拝堂（第 38 堂）の前方の開廊が実現された。その後 1980 年には、次節で述べる特別自然保護区が創設され、保存の諸課題はこの州立の財団に委ねられることになる。

宗教的管理についても一言すれば、1603 年に小さき兄弟会士にとって代わった改革派フランシスコ会士が、地域のコミュニティーとの論争の中で未解決のまま 1763 年にサクロ・モンテを去った後は、この巡

礼地はしばらく転任可能な礼拝堂付司祭たちによって司宰されていた。その後、1819 年に、サクロ・モンテの霊的救済のためにノヴァーラ管区の司教によってサン・カルロ・エ・ガウデンツィオ献身会の司祭たちがヴァラッロに送られた。しかし 19 世紀も時代が進むと、次第にサクロ・モンテの運営における司教の役割が縮小し、世俗のコミュニティーが有利となっていく。とはいえ、この巡礼地には依然として宗教的管理という重要な課題が残っており、現在も献身会の司祭たちがその管理を担っている。

1-7. 20 世紀第 4 四半期における「特別自然保護区」の成立とその役割

1-7-1. 「特別自然保護区」の成立とその役割、並びに世界文化遺産登録

現在のヴァラッロのサクロ・モンテについては、総体自体の所有者はヴァラッロのコムーネ、信仰面の管理者は上述の献身会の司祭たちとなっている。しかし、実際の管理は、ピエモンテ州が 1980 年 4 月 30 日の法令 n. 28 をもって創設した州組織、「サクロ・モンテ・ディ・ヴァラッロ特別自然保護区」（Riserva Naturale Speciale del Sacro Monte di Varallo）が担っている。この特別自然保護区の役割は、ヴァラッロのサクロ・モンテという極めて重要な歴史的・宗教的総体の復旧やメンテナンスを実施するとともに、この総体が科学的、文化的、教育・研究的目的で活用されるよう働きかけることにある。また、このサクロ・モンテがもつ環境や景観の諸特徴を保護、維持する役割も帯びている。このような任務をも

つ州組織の管理は、ヴァラッロ市とピエモンテ州、ヴェルチェッリ県の代表者からなる運営委員会が自らの組織内から実行委員会と会長を選出して行っているが、適切な財源による実際のサクロ・モンテの保護やメンテナンスは、同保護区に配属された美術史家である組織長や職員、エリアの植栽や基礎的設備の維持を担当する公園管理者や技術者らによって行われている。また、ヴァラッロの特別自然保護区は自らが編集所（Piazza della Basilica, località Sacro Monte, 13019 Varallo, VC）となり、ピエモンテ州が保護区としたその他のピエモンテのサクロ・モンテ群と協力して、2007年に「サクリ・モンティーピエモンテとロンバルディアのサクロ・モンテ群の美術と保存、風景、霊性に関する雑誌」(*Sacri Monti - Rivista di arte, conservazione, paesaggio e spiritualità dei Sacri Monti piemontesi e lombardi*)と題した雑誌を創刊し、世界文化遺産に登録された9つのサクロ・モンテの歴史や、保存・評価・活用・研究活動に関する広報にも努めている。

この州組織「特別自然保護区」の成立は、遡れば、1960年代以降、ピエモンテ州がその政治的職分のひとつとして自然環境保護を掲げ、幾つかの地域を特別な保護下に置くべき所としたことに関係していた。ある場所ないしは地域を特別な保護下におくための特徴的要素として、「自然環境に密接に結びついて一体となった重要かつ繊細な歴史的・芸術的遺産が際立つ地域の自然環境と建築群との緊密な関係」⁽³⁸⁾というエレメントが定められるとともに、1980年にまずはクレアのサクロ・モンテ

が特別保護の対象とされた。次いで同年中にヴァラッロとオルタのサクロ・モンテも対象に加えられた。また、後にはグイッファやドモドッソラ、ベルモンテ、オローパのサクロ・モンテも対象とされるに至った。こうした地域は、「特別自然保護区」などの法規で分類されているのが特徴で、管理・運営のための組織が、ヴァラッロの場合と同様、州の法令をもって創設されたが、それは、対象地区のさまざまな建築的、美術的、自然主義的構成要素を保護、保存して活用するとともに、所有者組織（時には地方自治体、時には管区や修道会など）を助けて、保存上の複雑で重大な課題を抱えた文化財を保存するためであった。「サクロ・モンテ・ディ・ヴァラッロ特別自然保護区」は、このような20世紀後半の州政府主導の文化財保護・保存計画の中で生まれたものであったのである。

その後しばらくの間、ピエモンテのサクロ・モンテ群の管理・運営組織は、「保護」と「利用」という問題に向き合いながら活動経験を積み重ねた後、ピエモンテ州主導で、2003年7月4日に、ピエモンテの7つのサクロ・モンテと、ヴァレーゼとオッスッチョという2つのロンバルディアのサクロ・モンテが、ユネスコの世界遺産委員会によって「人類の遺産」として認定されるに至る。それは、サクロ・モンテ群がその他の世界的に重要な場所と並ぶ比類のない「クオリティー」を所持していることを認めたものであると同時に、一連のサクロ・モンテ群の中でも、最古にして最も価値ある最高の総体がヴァラッロのサクロ・モンテであることを認めたものでも

あった。因みに、ユネスコによる世界文化遺産認定理由は、「教育的、霊的目的で自然の風景の中に具現された建築や聖なる美術から成る仕事は、北イタリアのサクロ・モンテ群においてその至高の表現に達し、それ以降の他のヨーロッパの展開に深い影響を及ぼした……。北イタリアのサクロ・モンテ群は、きわめて美しい風景の中における建築と美術との統合の成功を示すものである。それらは、カトリック教会史上の危機の時代におけるキリスト教的諸価値の回復のひとつの試みを証するもの……」⁽³⁹⁾と要約されている。

1-7-2. 長い歴史をもつメンテナンス・保存活動と現状

ヴァラッロにおけるメンテナンス・保存の長い歴史

ヴァラッロのサクロ・モンテは、他の重要なサクロ・モンテに比べても、2～3倍の礼拝堂数と1、2世紀の古さを誇っている。それ故か、芸術的遺産や自然遺産を保護するための関与を積極的に支持してもきた。

かつてヴァラッロのサクロ・モンテでは、礼拝堂の建造資金を管理していた世俗の組織である教会財産管理委員会が、必要となったメンテナンス作業についても関与してきた。また、司教は物語の選択を指揮して礼拝堂内に表現すべき場面を指示し、全体の演出に配慮しただけでなく、それらを守る保存手段についても定めていた。こうして定期的に礼拝堂の屋根の点検が行われ、礼拝堂内からは草木の葉や屑が取り除かれ、壊れたガラスも交換されていた。ま

た、壊れた彫刻も「修復」され、必要な箇所には塗り直しも行われていた。植栽と礼拝堂群との間にも巧妙な関係があり、装飾的役割を持つ草木は、建築にダメージを与えないよう意図的に離れた所に配されていなければならなかった。しかし20世紀には、こうした管理とメンテナンスの巧みな術策は次第に失われ、サクロ・モンテ群はいずれもなおざりにされ、中には放置されたサクロ・モンテもあった。それゆえ誕生した州立の特別自然保護区は、まずは正規、非正規にサクロ・モンテ群に関わることで、それらに再び品位を与え、中断したメンテナンスを再開に至らせたのである。

具体的には、当然ながら、まず緊急問題（例えば手すり、衛生設備の設置など）への対応がなされた。また、植栽に対しては組織的関与、文化遺産に対しては屋根から緊急関与を開始したりした。次いで、管轄の文化財保護局の助力を得て、次第にサクロ・モンテへの関与や作業の優先順位の決定に関する体系的な基準も作成され、州の資金によって修復が開始された。その後は、サクロ・モンテの観光的利用のための基礎設備に対する投資が増えるとともに、文化的活動や大学との接触も増大するなど、自らの活動を通して主要な銀行の信頼を得ることに成功し、そうした銀行から修復のための支援も受けられるようになった。

関与の主要な対象（屋根や樋・礼拝堂内・植栽）とメンテナンスの現状

ヴァラッロの総体は、サクロ・モンテ群のなかで、修復とメンテナンスの点でも抜きん出ており、保存方法を確定するための

試験台にもなっている。この総体の45の礼拝堂とひとつの泉は、それぞれ類似してはいても決して同じとは言えない問題（例えば物理的劣化や経年劣化、旧式のメンテナンス作業の中断、厳しい環境による影響の問題など）を抱えている。床が屋外の地面より低い礼拝堂もあれば地面より高い礼拝堂もあるし、日陰、あるいは日に晒されている礼拝堂もある。礼拝堂内の彫刻や壁画といった美術品が、木やテラコッタ、未焼成粘土（テッラクルーダ）、石灰製のモルタル、大理石粉など、湿度に対してそれぞれ異なる反応を示す多様な素材で構成されていることもあり、ヴァラッロで実施された関与は、礼拝堂内への湿気の浸透に対処するため、主として建物の屋根に対してなされてきた。事実、徹底的な点検を受けた屋根の数は、特別自然保護区の創設以来、約五分の四（約36堂）にもものぼるとい⁽⁴⁰⁾。

礼拝堂やその他の建物の屋根は、木の骨組みに板張りし、その上にオッソラ産の花崗岩質の石、ベオーラの石板を規則正しく積み重ねて据え付けられ、屋根の密封性は、積み重なったベオーラの石板が自重によって動かないことで保障されている。屋根の据え付けには、石板が滑らないように栗板を段階的に設置したり、水が淀まないよう穴のないベオーラを選んだり、水が問題なく下り去るようにベオーラをよく削ったりと、熟練した職人の技が必要となるが、ベオーラの石板は、うまく据え付けさえすれば数世紀は持ち堪えるとされる⁽⁴¹⁾。それゆえ、屋根が確実に維持され、雨水や雪解け水も規則正しく排出されるように、

春の大雪が降った後と秋の落葉の後の年2回、礼拝堂の屋根、並びに軒と排水用の樋の定期メンテナンスが行われるようになった。樋のメンテナンスは、言うまでもなく、水が樋からあふれ出て外壁の漆喰の上を流れると、壁体や堂内の壁画にも被害を引き起こす危険があるため実施されるものである。

屋根や樋などに関連して、礼拝堂の内部に対しても、州の文化財保護局と連動した定期的計画に従ってメンテナンスが進められた。この作業も、当初は州の文化財評議員局からの出資に支えられていた。1992年には、1名の修復家の監修の下に、礼拝堂の保存状態に関する整理が開始され、4年かけてすべての礼拝堂の点検、台帳の整理・分類、点検のために切り取った彫刻像の断片の保存が行われるとともに、全礼拝堂内の埃やクモの巣、昆虫の死骸や木の葉などの有機的沈殿物の除去清掃作業が実施された。そしてその後も、毎年1名の修復家によって整理台帳の確認・更新がなされ、表面の汚れやクモの巣、有機的沈殿物の除去が行われている他、彫刻像の薄い彩色層の浮き上がりなどが確認された場合には、当該箇所の簡便な固定作業なども行われている。礼拝堂の保存状態に関する台帳の整理方法も次第に練り上げられ、連続する定期作業の合間に緊急の作業を入れ込んだり、建物の状況に合わせて緊急作業を考えたりすることも可能になっているとされる⁽⁴²⁾。このようにして礼拝堂内の美術作品の良好な状態は保持されているのである。

植栽についても、この公園の自然遺産で

ある樹木に関する体系的研究に基づいて配慮がなされるようになった。具体的には、倒木の危険がある樹木が識別され、可能な限りそれらの保存が図られるとともに、訪問者の安全も確保されている。同時に、1年の異なった時期に通常業務として実施すべき植栽の管理作業に関する計画が示され、併せて定期点検によって必要とされた臨時的作業も行われるようになった。

（次号に続く。）

【註】

- (1) S. Stefani Perrone, *Guida al Sacro Monte di Varallo*, Torino, 1995, pp. 32-33
- (2) ヴァラルロのサクロ・モンテに関する研究史については、同総体を論じた各書籍の巻末に必ず列挙されているが、大野陽子『ヴァラルロのサクロ・モンテ 北イタリアの巡礼地の生成と変貌』三元社 2008年（第一章第二節 pp. 24-28）が参考になる。また、同書の逆ノンブル pp. 33-56には、同サクロ・モンテに関係する2006年までの詳細な文献一覧も掲げられている。
- (3) 拙著『サクロ・モンテの起源 西欧におけるエルサレム模造の展開』勉誠出版 2017年（第一章二節 pp. 28-45、先行研究一覧は巻末の「参考文献中」の逆ノンブル pp. 21-22）を参照されたい。なお当該部分は、同書刊行に先行して、拙稿「研究ノート イタリアのサクロ・モンテ研究小史」『藝叢』第23号 2007年 pp. 117-130として発表している。
- (4) P. Galloni, *Uomini e Fatti celebri in Valle Sesia*, Borgosesia, 1978, pp. 65-86; Perrone,

op. cit., pp. 19-22; E. D. Filippis, *Guida del Sacro Monte di Varallo*, Borgosesia, 2009, pp. 154-155などを参照。

- (5) C. Debiaggi, *il Sacro Monte di Varallo, "Breve storia della Basilica e di tutte le cappelle"*, Guida cura dell' Amministrazione Vescovile del Sacro Monte, Varallo Sesia, III Edizione, 1996, p. 4
- (6) D. Filippis, *ibid.*, p. 154
- (7) 1514年時点で場面の設営が完了していた山上の礼拝堂数を、ペッローネ女史は21堂以上（Perrone, *op. cit.*, p. 22）としているが、登山路上や「建造中」、「建造予定」の礼拝堂を除くと、稿者によれば20堂である。但し、登山路上のものを含めると21堂、さらに建造中のものを含めると24堂となる。
- (8) カイーミの構想になる初期の山上の様子については、関根『前掲書』第3章「ミラノ管区ヴァラルロのサクロ・モンテ」 pp. 121-189、特に「一節」の先行研究史を参照されたい。邦語論文には、大野陽子「ヴァラルロのサクロ・モンテ—初期構想とその展開—」『イタリア学会誌』第55号 2005年 pp. 131-156や、水野千依「ヴァラルロのサクロ・モンテ創設期におけるベルナルディーノ・カイーミの構想—〈場の記憶〉と〈心の巡礼〉—」『GENESIS』第9号 2005年 pp. 195-214、大野『ヴァラルロのサクロ・モンテ…前掲書…』 pp. 37-86、さらに拙稿「フラ・ベルナルディーノ・カイーミの「代用エルサレム」—ヴァラルロのサクロ・モンテの失われた初期の形態について（上）」『藝叢』第21号 pp. 1-34; 「同上（下）」『藝叢』第22号 pp. 49-74

- などがある。
- (9) Anonimo, *Tractato de li capituli de passione: Questi sono li misteri che sono sopra el Monte de Varale*, Milano, 1514. 同書の内容は、A cura di S. S. Perrone, Introduzione di G. Testori, *Questi sono li misteri che sono sopra el Monte de Varale (in una 'Guida' poetica del 1514)*, Borgosesia, 1987 中に復刻されている。また、大野氏の著書の末尾の「付録」には、その全邦訳が掲載されている（大野『前掲書』の「付録」逆ノンブル pp. 1-8）。
- (10) D. Filippis, *op. cit.*, p. 21
- (11) Perrone, *op. cit.*, p. 24
- (12) *Il Rinascimento di Gaudenzio Ferrari*, a cura di G. Agosti e J. Stoppa, Milano, 2018, pp. 76-81; J. Schell, P. Venturoli, “DE DONATI”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Volume 33, 1987 など多数の文献がある。
- (13) R. Casciaro, *La scultura lignea lombarda del rinascimento*, Milano, 2000, pp. 286-287 は、《復活のキリスト像》をマエストロ・デッラ・マドンナ・ディ・イントラ（アンブロージョ・ダ・アンドレーア？）か、として、特定の芸術家名を挙げ、P. Venturoli, *Studi sulla lignea lombarda tra Quattro e Cinquecento*, Torino, 2005, p. 221 も、同像をマエストロ・デッラ・マドンナ・ディ・イントラとしている。 *Il Rinascimento di Gaudenzio ...*, *op. cit.*, p. 73. 拙稿「ヴァラッコのサクロ・モンテの彩色木彫ー第43堂〈キリストの墓〉の《死せるキリスト》像再考ー」『デアルテ』35号 2019年 pp. 124-125
- (14) *Il Rinascimento di Gaudenzio ...*, *op. cit.*, p. 82-93
- (15) F. Sesalli, *Breve descrizione del Sacro Monte di Varallo di Valsesia*, Novara, 1566
- (16) Perrone, *op. cit.*, p. 25
- (17) フェルモ・ステッラについては、S. Facchinetti, “Fermo Sterra, satellite di Gaudenzio”, in *Fermo Sterra e Sperindio Cagnoli seguaci di Gaudenzio Ferrari*, a cura di G. Romano, Milano, 2006, pp. 39-57、ジョヴェノーネについては Aa. Vv., *Gerolamo Giovenone Un capolavoro ritrovato*, Milano, 2018, 特に経歴は pp. 77-79 を参照されたい。
- (18) Perrone, *op. cit.*, p. 25
- (19) Perrone, *op. cit.*, pp. 24-25
- (20) アレッシの手稿 *Libro dei misteri* は、現在、コムーネ・ディ・ヴァラッコのファリノーネ・チェンタ図書館アルキヴィオに収蔵されているが、1974年に序文や評論を添えて2巻本として出版されている（Galeazzo Alessi, *Libro dei misteri. Progetto di pianificazione urbanistica architettonica e figurativa del Sacro Monte di Varallo in Valsesia (1565-1569)*, Prefazione di A. N. Brizio, Commento critico di S. S. Perrone, Borgosesia, 1974）
- (21) Debiaggi, *op. cit.*, p. 7. 同書によれば、聖カルロは1568、71、78、84年の少なくとも4回ヴァラッコを訪問している。
- (22) Perrone, *op. cit.*, p. 28
- (23) フィアミンギーニについては、A. G. Sola, *Il Fiamminghino*, Milano, 1973; G. Riviera, *La strada del Fiammingo Dal Brabante al Monferrato: i Tabachetti di Fiandra*, Torino, 2017 などのモノグラフや研究書が刊行されている。
- (24) ジョヴァンニ・デンリーコやデンリーコ

- 一家については、単行書は存在しないものの、C. Debiaggi, *Dizionario degli artisti valsesiani*, Varallo, 1968, pp. 43-51. Galloni, *Uomini e Fatti celebri ... op. cit.*, pp. 163-180 など、多くの論考や書籍中で紹介、言及されている。
- (25) ドメニコ・アルファーノ (Alfano) と表記されているものもあるが、ペルージャ出身のドメニコ・アルファーニのことであり、彼は、大野『ヴァラッロの…前掲書』pp. 130-131によれば、1593、94、99年の巡察に同行してヴァラッロを訪れていた。
- (26) Debiaggi, “RAVELLI Bartolomeo”, *Dizionario ... op. cit.*, pp. 146-147
- (27) モラッツォーネはさまざまな研究書や案内書で言及される他、1962年に展覧会が開催され、図録 (*Il Morazzone - Catalogo della Mostra*, a cura di Mi. Gregori, Milano 1962) も刊行されている。さらに浩瀚なモノグラフ、J. Stoppa, *Il Morazzone*, Milano, 2003も刊行されている。
- (28) アントニオ・デンリーコ (タンツィオ・ダ・ヴァラッロ) もさまざまな研究書で言及される他、1960年にはトリノのマダム宮で展覧会が開催され、*Tanzio da Varallo*, a cura di G. Testori, Torino, Palazzo Madama, 1960の図録も刊行されている。さらに2000年にもミラノのパラッツォ・レアーレで展覧会が開催され、図録も刊行されている (Aa. Vv., *Tanzio da Varallo - Realismo fervore e contemplazione in un pittore del Seicento*, Milano, 2000)。
- (29) Debiaggi, “MARTINOGLIO Cristoforo”, *Dizionario ... op. cit.*, pp. 111-112; Galloni, *Uomini e Fatti celebri ... op. cit.*, pp. 181-186
- (30) Debiaggi, “SCETI Gaudenzio”, *ibid.*, p. 158
- (31) A. Spiriti, “GHERARDINI, Melchiorre, detto il Ceranino”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 53, 2000
- (32) Debiaggi, “GIANOLI Pier Francesco”, *Dizionario ... op. cit.*, pp. 77-73; Galloni, *Uomini e Fatti celebri ... op. cit.*, pp. 187-196
- (33) デイオニジ・ブッソラもさまざまな研究書や案内書で言及されるが、近年刊行・発表の主要なもののみを挙げれば、Aa. Vv., *Un artista del Seicento tra Piemonte e Lombardia. L'opera dello scultore Dionigi Bussola nei Sacri Monti*, Atti del convegno, Domodossola, 5 giugno 2004, Gravellona Toce, 2006がある。
- (34) G. Chevalley, “ALFIERI, Benedetto”, in *Enciclopedia Italiana*, 1929; *La Reggia di venaria e i Savoia - Arte, magnificenza e storia di una corte europea*, a cura di E. Castelnuovo, Moncalieri (Torino), 2007, Vol. 1, pp. 163-164, Vol. 2, p. 79, p. 84
- (35) “Tantardini, Carlo Antonio”, in *Dictionary of Artists*, Benezit, Vol. 13, Paris, 2006, p. 682
- (36) R. A. Tardito, “BERNERO, Giovanni Battista”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 9, 1967
- (37) L. Patetta, “Ceruti, Giovanni”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 24, 1980
- (38) D. Filippis, *op. cit.*, p. 13
- (39) D. Filippis, *ibid.*, p. 13
- (40) D. Filippis, *ibid.*, p. 18
- (41) D. Filippis, *ibid.*, p. 18
- (42) D. Filippis, *ibid.*, p. 20

【図版出典】

図1 : F. Fontane, P. Sorrenti, *Sacri Monti-Note*

architettonico-urbanistiche, 1980 掲載の配置
図を若干修正

図 2-14、15-22 : 稿者撮影

図 14-1 : *Artisti del legno. La scultuta in Valsesia dal XV al XVIII secolo*, a cura di G. Testori e S. S. Perrone, Borgosesia, 1985, Fig. 16

図16 : Galeazzo Alessi, *Libro dei Misteri. Prpgetto di pianificazione urbanistica, architettonica e figurativa del Sacro Monte di Varallo in Valsesia (1569-1569)*, Prefazione di A. M. Brizio, Commento critico di S. S. Perrone, Vol. primo, Arnoldo Forni Editore S. p. A., 1974, c. 10 verso e c.11 recto

【謝辞】

本稿は JSPS 科研費 18K00177 (研究代表) の助成を受けて行った研究成果の一部である。また、礼拝堂内の写真と「塗油石」の木彫群像 (図 13、13-1) は、それぞれサクロ・モンテ・デイ・ヴァラッロ管理運営財団、ヴァラッロ絵画館の許可を得て職員立会の下に撮影させて頂いたものである。記して厚く御礼申し上げる次第である。

図 版

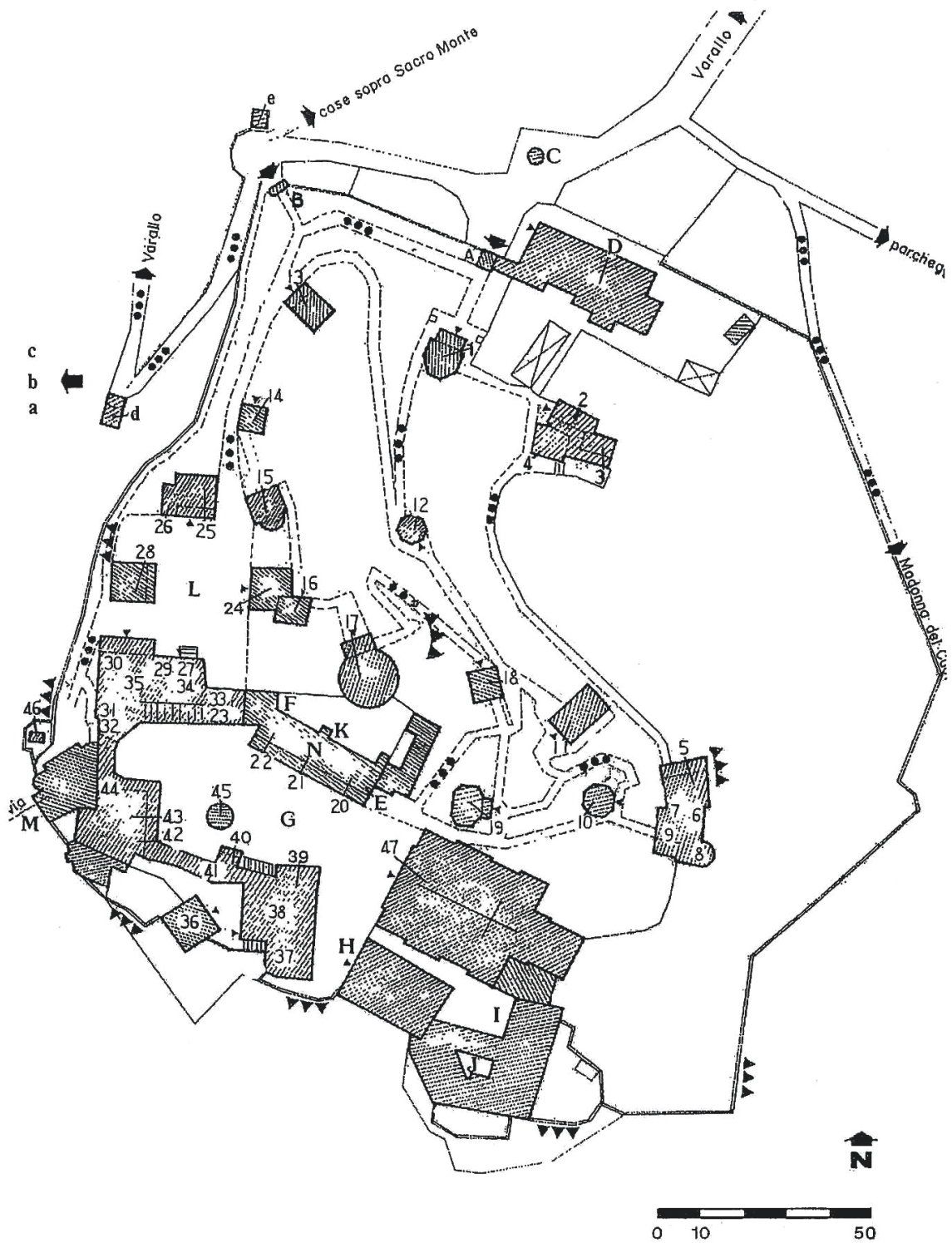


図1 現在のサクロ・モンテの礼拝堂群の配置図

(*Sacri Monti Note architettonico-urbanistiche*, 1980掲載の配置図を若干修正)

凡例 ●●●：歩行者用巡礼路／▲▲▲：展望所／▲：出入口／（ ）：礼拝堂の建設年代

登山路上

a. ラ・ピアナッチャ (19世紀末) / b. 聖母の休息 (16世紀初め) / c. 砂漠の聖ヒエロニムス (17世紀初め?、20世紀初頭に再建) / d. チェーザレ・マーギ (1566年頃) / e. 白いイエス (18世紀前半?)

山 上

1. アダムとエヴァ (1566年) / 2. 受胎告知 / 3. マリアの聖エリサベツ訪問 / 4. 聖ヨセフの最初の夢 (=天使からマリアの懐妊についてのお告げを受ける聖ヨセフ) / 5. マギの到着 (1519-20年) / 6. キリストの降誕 (15世紀末) / 7. 羊飼いの礼拝 / 8. 神殿への奉獻 (=キリストの割礼) / 9. 聖ヨセフの2度目の夢 (=天使からエジプトへ逃避するようお告げを受ける聖ヨセフ) (1572年) / 10. エジプトへの逃避 (1576-80年) / 11. 嬰兒虐殺 (1586年) / 12. キリストの洗礼 (1572-76年) / 13. キリストの誘惑 (1500年頃建造の旧礼拝堂→1580年頃献堂対象変更) / 14. サマリアの井戸 (1572年より前-1576年) / 15. 中風者の治癒 (1572年より前-1576年) / 16. ナインの寡婦の息子の蘇生 (1572年より前に着工、1576-80年完成) / 17. タボル山上でのキリストの変容 (1572年より前に着工、1647年より前に完成) / 18. ラザロの蘇生 (1576-80年) / 19. エルサレム入城 (1572年着工、1576-80年完成) / 20. 最後の晩餐 / 21. 園でのキリストの祈り / 22. 使徒を目覚めさせるキリスト / 23. キリストの捕縛 (1617年) / 24. アンナスの法廷でのキリスト (1737-40年) / 25. カイアファの法廷でのキリスト (1617年完成) / 26. ペテロの悔恨 (1617年完成) / 27. ピラトの官邸でのキリスト (1595-1610年) / 28. ヘロデの法廷でのキリスト (1619-29年頃) / 29. ピラトの官邸に戻るキリスト (1641年) / 30. 笞刑 (1605年) / 31. 荊冠 (1605年までに完成、1608年拡張) / 32. 法廷に上るキリスト / 33. エッケ・ホモ (1603年ほぼ完成) / 34. 手を洗うピラト (1608年より前-1617年) / 35. 死刑の宣告を受けるキリスト (1610年) / 36. カルヴァリオへ上るキリスト (=十字架を負う) (1589-94年) / 37. 十字架に釘で打ち付けられるキリスト (1631-37年) / 38. 磔刑 (1520年より前に着工) / 39. 十字架降下 (1632-39年) / 40. ピエタ / 41. 埋葬 (=聖骸布にくるまれたキリスト) / 42. 聖フランチェスコの祭壇 / 43. キリストの墓 (1491年) / 44. 聖カルロ・ボッロメオ / 45. 復活のキリストの泉 (16世紀の最初の10年間) / 46. 聖母の墓 (1491年) / 47. 聖母被昇天教会堂 (1614-42年、ファサードは19世紀末)

A. 主門 (1566年) / B. 補助門 / C. 噴水 / D. サクロ・モンテ・ホテル / E. 金門 (1572年) / F. サクロ・モンテ宿泊所 / G. ピアッツァ・デル・テンピオ (神殿の広場) / H. 巡礼者の宿泊所 / I. 労働修士の家 / J. 旧教会堂 / K. サクロ・モンテ博物館・図書館 / L. ピアッツァ・デイ・トリブナーリ (法廷の広場) / M. ヴァラッロ-サクロ・モンテ間のロープウェイの発着所 / N. カーザ・パレッラ



図2 ヴァラッロのサクロ・モンテ遠景



図3 サクロ・モンテからの市街地の眺望
(セージア川：上方、マスタッローネ川：右上方)



図4 聖域（囲い地）を囲む壁体



図5 森林的ゾーン



図6 神殿の広場（中央が聖母被昇天聖堂）



図7 法廷の広場



図8、8-1（部分） ジョヴァンニ・デンリーコ《サクロ・モンテを手にしたフラ・ベルナルディーノ・カイーミ像》（1638年）テラコッタ 彩色



図9 第43堂「キリストの墓」入口、図9-1 入口の上の縁起に関するラテン語碑文



図10 「ナザレ」の総体



図11 「ベツレヘム」の総体



図12 ガウデンツィオ・フェッラーリ 《キリスト伝》(トラメッツォ上の壁画)
1513年 サンタ・マリア・デッレ・グラーツィエ聖堂 ヴァラッロ



図 13 デ・ドナーティ兄弟？ 旧「塗油石」の群像 15世紀末 木彫 彩色 ヴァラッロ絵画館蔵

図 13-1 背側から割り抜いた後、蓋をしたことが分かる右端の人物像の背面



図 14 不詳の彫刻家 第20堂「最後の晩餐」の修復後のキリスト像

図 14-1 修復前の同堂キリスト像（右） 15世紀末 木彫（マネキン） 石膏に浸した布 彩色



図 15 ガウデンツィオ・フェッラーリ 第38堂「磔刑」の彫刻と壁画 木彫・テラコッタ 彩色

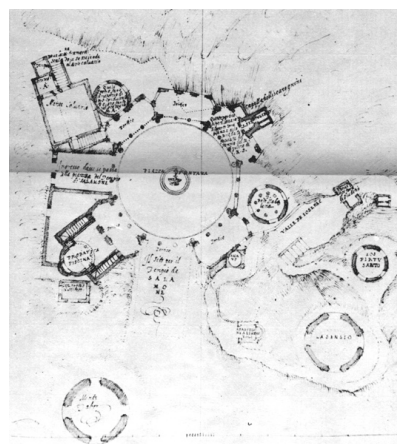


図 16 G. アレッシによる山頂西側の再整備案（1565-1569年）ヴァラッロファリノーネ・チェンタ図書館蔵



図17 G. アレッシ設計の聖域への入口（ポルタ・マッジョーレ）1566年



図18 G. アッリゴーニ《聖カルロ・ボッコメーオ》像（第44堂）1772年
テラコッタ 彩色



図19 G. デンリーコの自刻像と息子とされる親子像（第33堂「エッケ・ホモ」より）1608-09年 テラコッタ 彩色



図20 聖母被昇天聖堂のクーポラ
テラコッタ：D. ブッソラー家、G. B. ヴォルピーニ、他 1660～1678年頃
壁画：モンタルディ兄弟、A. クッキ 1748～50年



図21 第21、22、23堂上の世俗の住居「カーザ・パレッラ」1816年



図22 第43堂「キリストの墓」上の世俗の住居 1863年